

キヌアの苗立枯病（新称）

令和3年10月、養液栽培ハウスのキヌアに、胚軸が細くなり徒長し、地際から倒伏枯死する苗立ち枯れが発生した。栽培中のキヌアの約10%に発生が認められたが、同ハウス内の同じ養液で栽培されていたあぶらな科やキク科の作物では本症状は見られなかった。病斑部の細胞内には多数の卵胞子が形成され、卵菌類が分離された。PDA培地等での培養形態や生育温度、リボゾーム遺伝子ITS領域の塩基配列により、*Aphanomyces cochlioides* Drechsler および *Aphanomyces* sp. と同定された。養液栽培条件及び育苗土を使用したポット栽培でキヌアを播種し分離菌株を接種したところ、原病徴が再現されるとともに罹病部分に卵胞子形成が確認され、接種菌が再分離された。*Aphanomyces* 属菌によるキヌアの病害は国内外の養液栽培および土耕栽培のいずれでも報告がないことから、本病をキヌア苗立枯病（新称）として提案した。

（道総研・大阪公立大学大学院農学研究科）

A photograph showing two seedlings of Kinua (Aphanomyces cochlioides) growing in a green foam block substrate. The seedlings are showing symptoms of damping-off disease, with thin, elongated stems and visible roots at the base of the substrate. The background is dark.

キヌアの苗立枯病（長浜 原図）